

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	30 / 2011 / 26-30
タイトル	少年時代の記憶に残る昆虫(上)
著 者 名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

少年時代の記憶に残る昆虫(上)

第3代 五十嵐 正俊

まえがき

昭和35年から35年間、青森を離れて盛岡、つくば、京都、下館(茨城県)と流れ歩いたのであるが、私が青森を離れていた間に青森市近郊の自然環境は大きく様変わりしてしまった。

少年時代親しみ戯れてもらった昆虫たちも自然環境の変化に耐えられず絶滅あるいは絶滅危惧種に指定されているものも少なくない。

私の生まれ育った古川3丁目界限には万太郎堰と呼ばれていた水路があり、東北本線の南には鉄道防雪林(スギ林)があった。

また、住んでいた横丁には馬くろう屋さんもあり、馬を見るのは毎日のことだったし、時には馬尿、馬糞の匂いなどごく普通のことだった。

家の後ろは直ぐ線路だったし、線路脇の緑地、万太郎堰周辺など青森市内でも比較的自然環境には恵まれていた地域だったと思う。

兄弟も多かったので春～夏は兄たちと一緒に虫採りが遊びの中心だった。記憶を呼び醒まして見ると色々な虫達が登場する。

中でも、我が兄弟はトンボの羽化やバッタなどの幼虫から成虫への脱皮(羽化)にかなりの関心を持っていた。

トンボのヤゴ採り

少年時代の一般的な昆虫とのふれあいでは捕虫網を持ってトンボやチョウを追い掛けている様であるが、私共兄弟が一番多く経験したのはヤゴを獲て来て羽化の様子を眺めることだった。虫捕りといっても捕虫網や掬い網などは使わず、ほとんど手掴みであった。

トンボを捕らえるのも針金の輪にオニグモの巣(ネット)を絡め採り、その粘着力を利用して捕らえたりしていたが、ほとんどは羽化前のヤゴを採集することだった。

例えば「シオカラトンボ」は羽化が近づくと岸辺の水際に寄って来て泥の中に身を隠しているのだった。水際が泥になっている場所を指でなぞると尻尾をちょっと上げるので簡単に発見出来るのだった。

こんな要領で、4～5匹も捕まえば握り拳の中はいっぱいになるので、そのヤゴは自宅の排水溝(貫板の3面張り)に放流しておくのだった。

捕らえたヤゴの内、翅芽が十分に厚く、腹部の柔らかい個体は翌日確実に羽化してトンボになるヤゴだった。

「シオカラトンボ」の羽化は朝、学校に行く前?あるいは夏休みに入って間もない頃か日曜日の午前中に観察し



[写真1] 直立型羽化:コサナエ



[写真2] 倒垂型羽化:コシボソヤンマ



[写真3] 羽化休止期のシオカラトンボ



[写真4] シオカラトンボ



[写真5] キイトンボ



[写真6] コシボソヤンマ

ていた様に思う。水中から這い上がったヤゴは適当な場所で足場を固めて動かなくなる。やがて翅芽(翅の基になる短く畳まれた翅が入っている器官、4本ある)が左右に開かれる。数回この動作が繰り返されると左右の翅芽の間に亀裂が入り、白いトンボの肌が見えてくる。更に力む様な動作が加わり、見る見るうちにこの亀裂は広がり、首から左右の複眼へと2分して行く。そしてメリメリと音がするようにトンボの目玉が現れ、脚が魔法の様に軟かくなつて抜け出てくる。前脚、中脚、後脚と抜き出した頃には翅芽から短い翅も抜けてトンボの体は尾(腹部)が殻の中に残っているだけで後ろへ振り返った状態になっている。

そして抜き出した6本の足をきちんと胸元に折り畳む様な動作をして動かなくなる。

この間、10分足らずの時間なのだが、ほとんど息を止めて見詰めるのであった。やがて20分近い休止期の後、起き上がって腹部を抜き上げる。この段階までに脚の爪が固まり今脱ぎ終わったヤゴの殻に掴まっている。

体液が皺しわに畳まれている翅の翅脈(管状になっている)に送り込まれると翅は見る見る伸びていく。でも伸びた翅は柔らかく傷が付きやすい。翅が伸びきると乳白色だった翅は次第に透明となって行く。次に体液は腹部に送り込まれ、短かった腹部も伸びきり、余分になった水分が排出される。そして、ピカピカの翅が左右に開かれて新しいトンボが誕生する。

トンボの羽化はこの様に時間が掛かり、処女飛行するまでは非常に弱々しく、外敵に発見されれば防御の術がない。したがってヤンマ類の様に深夜に危険な羽化を終了させて夜明けとともに空中へと飛び立つものも多い。

また、羽化の仕方もヤンマ類やトンボ類の様にすっかり仰け反って一休みに入る「倒垂型」とサナエトンボ類やイトトンボ類の様にヤゴの殻から立ち上がるように「直立型」の羽化スタイルをとるものがある。羽化の時間帯も夜型、深夜型、早朝型、日中型などいろいろ変化がある。

トンボのヤゴは棲息場所にも好みがあり、少年時代にヤゴ採りをした万太郎堰下流はシオカラトンボ、ハグロトンボが棲んでいた。高学年になって少し遠征出来るように

なつてから出かけた苗代跡地ではアキアカネ、キイトンボなどが棲み、砂底の流水である西滝川ではヤンマ(記憶には「カトリヤンマ」の名前があるのだが、「コシボソヤンマ」だったのかもしれない)のヤゴも捕ることが出来たのだつた。

そして青森機関庫の近くでは「ベッタラヤゴ」と呼んでいた扁平なサナエトンボ(棲息環境から「ホンサナエ」の可能性もある)類のヤゴが獲れた。

広い池では「ギンヤンマ」が飛んでいるのだが、たまたま金沢変電所の四角に板で囲まれた池で 1匹だけ「ギンヤンマ」のヤゴを捕ったことがあった。

この貴重な「ギンヤンマ」の羽化を夏の夜、眠い目を擦りながら観察したのだった。

ヤゴの皮はやや透き通っていて、その中の色から「ギンヤンマ」だ!と子どもにも判る様なヤゴだったので、このヤゴの羽化は絶対見逃すわけにはいかなかった。

親父の商売用の花器が載せられていた棚の足に登らせたヤゴは40~50cm位の高さまで上り、動かなくなった。

やがて体を振り、爪をしっかり食い込ませるような動作をした。時間は判らないが、かなり遅い時間だった。眠い目を擦りながら息を殺して見つめる子供らの前で最初に翅芽を左右に開く動きがあった。何回か同じ動きがあった後、左右の翅芽の間から光りが射した様だった。薄緑色のギンヤンマの胸の色が現れたのだった。その美しい薄緑色の輝きは盛り上がる様にみるみる大きくなっていった。胸の亀裂は首から頭のところで左右に分かれて目玉が現れたかと思うと、柔らかくて長い脚がするすると抜けて来るのだった。前脚、中脚、と抜けて最も長い後ろ脚が抜ける頃には白い糸の様なもの(ヤゴ時代の呼吸管)が数本残り、トンボの体は大きく仰け反り、尻尾の先だけがヤゴの殻に残されているだけの状態でヤゴの殻にぶら下がっているだけだった。

バラバラに天空を指していた6本の脚は胸元に折り畳まれて動きが止まった。何時の間に出たのか胸の後ろにはクシャクシャになっている小さな4本の棒の様な翅もある。気が付けば大きな緑色のトンボの目玉が一回り大きくなっているようだ。

何分経過したのだろうか、非常に長い時間、兄弟達は息を殺しながら見つめていた。

次の動作はほんの一瞬の出来事だった。それまでヤゴの殻にぶら下がっていた大きな目玉が上になって6本の脚でヤゴの殻に掴まっていたのだった。そして尻尾を丸めるようにして殻の中から尻尾(腹部)を抜き上げた。翅はもう根元からふわふわ伸び出していた。

まるで魔法の様に柔らかい乳白色の翅が4枚重なったまま見る見るうちにふわふわと伸びて広がって行くのだった。大きく広がった翅の先端が尻尾の先を超えている様だった。

しかし、翅が伸びきった段階で次に腹部が伸びていくのだった。少し背面が赤く見えるギンヤンマの腹部は丸太ん棒の様に丸いまま伸びて再び重なっている翅の先端を超えた。



[写真7] ギンヤンマのヤゴ



[写真8] 羽化したギンヤンマ



[写真9] 翅を開いたギンヤンマ



[写真10] 水中のミズカマキリ



[写真11] ミズカマキリの口器



[写真12] 前胸がパクッと折り曲がる



[写真13] 前脚を担ぐと同時に飛翔

やがて、尾の先から水滴がポタポタ落ちた。余った水分を排出するかの様だった。そして引きしまったトンボへの変貌が終わる頃、翅はガラスの様に透き通って黄色の翅脈も美しい飛ぶ宝石「ギンヤンマ」の羽化が完了する(少年時代どの段階まで見とれていたのか途中で記憶は途切れている)。

一般に羽化というトンボ類にとって無防備で最も危険な一時を乗りきったトンボたちは「カラスなどの天敵が動き出す前に朝焼けの美しい初夏の空へピカピカの翅を羽ばたいて飛び立って行くのだった。

ミズカマキリ

小川や池の中にはいろいろな昆虫も棲んでいる。トンボのヤゴもそうだが、細長くて脚も長く、前脚が「カマキリ」のようになっている「ミズカマキリ」がいる。

この「ミズカマキリ」にも玩具の様に遊んでもらった。少し濁っている様な池でも網で掬うとよく網に入ってくるのだった。

細長い脚が網の中では絡まって動きが鈍いのか「コブナ」などがピチピチはね回る中でもそもそと長い脚を持て余している様だった。

バケツの中に入れても細長い脚で水をかくのだが動きは鈍く直ぐ何かに掴まって仕舞う。体の構造も変わっている。「カマキリ」の様な脚があることは前にも書いたが、細い体の先に目玉が大きく左右に飛び出している。その前方に余り長くない針の様な突起(口器)がある。カマキリの様な少し長い首(前胸背)があってその腹側前方に前後に折り畳むことが出来る鎌(捕脚肢)の様な前脚がある。腹部の末端には体長程の長い呼吸管があり、水中では水草などに括まりながらその長い呼吸管を水面に出して呼吸している。

ミズカマキリの動作は鈍いが水中のハンターなのだ。普段は水草などに括まって長い呼吸管を水面に出して待ち伏せしている。

メダカやオタマジャクシが不用意に近付くと一瞬の早業で鎌になった脚で獲物を捕らえるのである。そして針の

ような口器から蛋白消化液が注入されて液化した獲物の肉を吸い取るのである(体外消化)。

しかし、網に入ったミズカマキリを陸に上げておくと面白い動作が観察できる。しばらくは中・後肢の4本脚で歩行しているが、体が乾いてくると鎌状の脚を使って飛び出している目玉を丹念に磨く。

磨き終わると前脚を前方に突き出したかと思うと、前胸背と胸部の境目がパクッと折り曲げられ、前脚を肩に担ぐような動作をしたかと思うと背面に畳まれていた翅を開いて一瞬の内に飛び立って行くのである。この動作は真に早くてカメラのシャッターが間に合わない。

前胸背がおり曲げられた姿は一時期日本の空にもやってきたフランスの旅客機コンコルド機が離・着陸時にキャビンの視界を確保するために機首前方を折り曲げるのと似ている。

まさか、あのアイデアがミズカマキリに由来しているとは思わないが…。

手掴みできた「マダラヤンマ」

少年時代には名前が判らなかったのだが、子供でも素手で捕まえられるヤンマがいた。

それは夏の終わるか秋になってからだと思うが、旭町の踏切りの西側に鉄道防雪林があった。日中何時でも捕れるのではなく夕日が沈む一定の時間帯に限られていた。

西日が防雪林のスギを赤く染める頃、何処からやって来るのかヤンマが飛んできて林縁の枝(子供でも手の届く高さ)にぶら下がる様に休みに来るのだった。一旦止まったヤンマはあまり動かないので小学生だった我々兄弟でも少し慎重になれば翅を掴んで捕らえることが出来たのだった。そのヤンマたちにはブルー系のトンボ(♂)とグリーン系(♀)のトンボがいた。



[写真14] マダラヤンマ (高橋克成氏撮影)

大人になってからその特徴から「マダラヤンマ」というヤンマ類の中ではやや小型の種類であることが判った。小型ながら美しいヤンマで♂はブルー、♀は黄緑色であった。

私ども兄弟は殺して標本にするなど全く考えなかった。一通り蚊帳の中に放して観察したあとは放してやったのだと思う。虫ピンも標本箱も持っていなかった。

この美しい(ギンヤンマほどではないが)ヤンマがどんなヤゴから羽化するのは分からない。このヤンマが捕れるスギの防雪林には余り綺麗でない沼があったので、そこが繁殖池だったのかもしれない(近年、「しらかばビオトープ」の池でも繁殖が確認されている)。

採草地で見た「ウスバカマキリ」

浪館～三内丸山一帯の採草地は個人的にも学校の遠足でもしばしば訪れた場所だった。

この採草地には「キリギリス」のほか印象に残っているのは「オオカマキリ」よりは小型で良く飛翔する小型の「カマキリ」がいた。もちろん当時は種名など知らなかったのだが、前脚の内側にある斑紋の特徴から「ウスバカマキリ」が生息していたの間違いない。

この可愛らしい「カマキリ」は♂が茶色で、♀は薄緑よりは乳白色に近い色彩だったと記憶している。また、卵鞘はオオカマキリの俵型に比較すれば非常に小さく蒲鉾型で僅かに盛り上がっているだけで、「ヤマネコヤナギ」の根際などにくっ付いていたと記憶している。現在では青森県レッドデータブックでBランクになっているが、上記の採草地ではごく普通に見られた種類だった。

(次号に続く)